

## 大津市立仰木の里東小学校 森林環境学習「やまのこ」事業

### <はじめに>

#### 事業の目的

次代を担う子どもたちが、森林への理解と関心を深めるとともに、人と豊かにかかわる力をはぐくむため、学校教育の一環として、森林環境学習施設およびその周辺森林で体験型の学習を実施するものとする。

大津市では、従来の「ふるさと体験学習」を発展させる形で引き継がれている。

単に「体験する」というものでなく、総合的な学習の時間の一单元として位置づけ、森林環境学習を推進する。

### <森林環境学習でめざすもの>

- ・環境の「もの知り」を育てるのではなく、自分も環境問題の原因者の一人と自覚して、自分の生活自体を見直し改善するという行動に結びつけること。
- ・今まで持っていた「木を伐ることはいけない」というような単一的、短絡的な考え方でなく、木を伐ることがどういう意味を持っているのかなどの考え方に触れることで既存の価値観の転換の契機にすること。
- ・体験を通して、「森林への関心と理解を深めること」「森林との関わり合い方(森林の問題)」「山村との関わり合い方(人・地域の問題)」「自分自身との関わり合い方(価値観の問題)」などを学ぶこと。

### <今年度の森林環境学習について>

单元名 「森のことを考えよう～1本の割りばしから～」

#### 单元を構成するに当たって

「木を伐ることはいけない」という考えは子どもたちのみならず、現代の大人の多くが抱いている考えである。確かに近年の地球温暖化問題をはじめとする環境問題は人類にとって大きな課題である。しかし、だから木を伐ることに反対し、目先の木製品を使わない方がよいと考えることは果たして本当に正しいのだろうか？子どもたちが持っている近視眼的、短絡的なものの見方、考え方に揺さぶりをかけることで、巨視的な観点で物事を見つめることの大切さを感じるきっかけにしたい。また、環境問題は遠い世界の問題ではなく、自分たち一人一人の日常生活の中で起きているということに気づかせたい。自分一人が行動を起こしても何も変わらないと思うかもしれないが、たまたますべての人が同じように行動を起こせば世の中は変わるかもしれない。一人の行動だけじゃ変わらないけれど、一人の行動から世界が変わるかもしれない。この学習を通して、自分の生活を見直したり、新しい価値観を感じさせたりしたい。

さらに、「洪水を防ぎ、渇水を緩和する」「水を浄化する」「地球温暖化を防ぐ」「安らぎや憩いの空間を作る」「生活の糧を得る」「信仰の対象」「人以外の生き物の生活の場」など森の多様な働きを知り、感じる中で、人と森林のつながりやどうすれば両立できるのかというようなことにも気づかせたい。

葛川ふるさと体験学習・やまのご事業を核にした単元を通して、森について関心を持ち、自分なりの課題を持ち、追求していく態度を養うことを目的とした学習活動を展開していきたい。

### 1. 単元のねらい

実際に森林に入り、五感を通して、体全体で「森」を感じたり、「森づくり体験」をしたりすることにより、木や森林に興味・関心を持ち、「自分たちの生活とのつながり、木や森林の大切さ・すばらしさ・よさ」に気づき、理解することができる。

国産間伐材割り箸の意味を考えることで、間伐（森林整備）の大切さを理解し、森林の働きやよさなどについて自分なりにまとめることができる。

### 2. 学習のおもな流れ（17時間＋当日 事前活動 ふるさと体験当日の活動 事後活動）

国産割り箸の意味を考えることで、間伐の大切さを理解し、森林の働きやよさについて考える。

（2）10/7・10/14

学習活動	予想される児童の反応	備考
<p>&lt;事前学習：第1時&gt; 10/7</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・森林について知っていることを話し合う。</li> <li>・森林からもらっているものは何だろう？</li> <li>・割りばしを使うことはいいことだろうか？</li> </ul>	<p>「木がある」「鳥や動物のすみか」「山菜が採れる」「水がある」</p> <p>「空気(酸素)」「木材」「水」「緑」など</p> <p>「よくない」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・木をむだにしている</li> <li>・空気(酸素)がなくなる</li> <li>・ごみがふえる</li> <li>・木がかawaiiそう</li> </ul> <p>「よい」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・使いやすい</li> <li>・忘れたときに便利</li> <li>・外で使える</li> </ul>	<p>自分の課題につながっていくと考えられる。</p> <p>「よくない」という答えが多いように予想される。</p> <p>何故よくないのかという理由を考えさせ、その意見を補足する形で資料を与える。</p>
<p>&lt;事前学習：第2時&gt; 10/14</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・国産間伐材割りばしを見て、気づいたことや疑問に思うことについて話し合う。</li> </ul>	<p>「わりばしを使うことがどうして地球温暖化防止につながるのだろう？」</p> <p>「使うほどに森林の育成につながるとは、どういう意味だろう？」</p>	<p>5円の木づかい箸を見せる</p>

<ul style="list-style-type: none"> <li>・元気な森と元気でない森の二枚の写真を比べて元気な森とはどういう森なのかを知る</li> <li>・「間伐」の意味を知る。 「元気な森に必要な空間を作るために木を伐ることを間伐という」という言葉でおさえる</li> <li>・今日の授業の感想を交流する</li> </ul>	<p>元気な森とは</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・明るい（日が差している）</li> <li>・木がまっすぐで太い</li> <li>・根が見えていない</li> <li>・下草が生えている</li> </ul>	<p>元気な森とそうでない森との写真を見せる</p>
--	---	----------------------------

体験学習のプログラムの概要を知らせ、活動の見通しを持たせる。(1)

実際に森に入ったり、間伐をしたりしてみよう。

当日の学習用しおりを作成する。(特活1)

間伐・枝打ち体験を通して、「間伐の大切さ」を体感する。

森の中に入り、五感を通して、体全体で森を感じる。

「森で働く人」から「森を守るお話」を聞き、森を守りたいへんさや大切さを理解する。

ファイヤーを通して、森のめぐみを感じる。

間伐材を利用し、「マイ箸づくり」をする。

体験してきたことをもとに、森や間伐の大切さについてまとめる。(2)

調べたい課題を決め(課題設定)、調べ、まとめる。(7)

<p>&lt; 課題例 &gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・間伐について</li> <li>・木材の輸入について</li> <li>・地産地消について</li> <li>・木づかい運動について</li> <li>・生物の多様性について</li> <li>・木材の利用について</li> </ul>
---

<p>&lt; 実際の課題例 &gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・間伐について</li> <li>・木で作られるものについて</li> <li>・林業について</li> <li>・滋賀県の森について</li> <li>・森からもらえるものについて</li> <li>・世界の森について</li> <li>・森にすむ動物について</li> </ul>
---

ゲストティーチャーとして「やまのこ専任指導員」や「市役所の林業担当者」を考えている。

施設の職員および専任指導員が事後学習サポート(11/4)

まとめたことを保護者に知らせる。(4) クラスごとに発表会(12/2:参観日)

<ふるさと体験学習・やまのこ事業での活動>

間伐・枝打ち体験、サーチ・ザ・ツリー、森で働く人からのお話、キャンプファイヤー、マイ箸づくり

## < 考察 >

本単元を構成するにあたってまず考えたことは、新指導要領への移行に伴い総合的な学習の時間の内容が厳密化される中で、今年度から完全実施となった「やまのこ」事業をどう本校の教育課程の中に位置づけるかということである。

この事業を単にひとつの「体験」ととどめるのではなく、この事業を核にした森林環境学習としての総合的な学習の時間の単元をつくらうと考えたのである。

本校は、新しく開発された住宅街にあり、ほとんどが転入の児童である。テレビや本などからの情報量は比較的豊富に持っているが、実感を伴った理解や自分自身の問題として物事を捉える面が弱い。環境問題についても同様で、「温暖化」や「酸性雨」、「砂漠化」などの言葉はよく知っており、情報としても持っているが、それが何なのかという深い理解やだからどうしなければならないのかというようなところにまでの思いには至っていない。また、森林伐採についてもステレオタイプ的に「木は伐ってはいけない」と考えているような感じである。謂わば、机上の空論を持っているような状況である。

こうした児童に対して、「環境もの知り」を増やすような環境学習ではなく、子どもたちの既存の価値観の転換を図ったり、自らが環境に関わる生活者としての視点を育んだり、さらには、自らの生活を見直す契機となったりするような学習が必要と考えたのである。こうした考えのもと、総合的な学習の時間「森について考えよう」という単元を構成した。

総合的な学習の時間は言うまでもなく、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成することをねらいの一つとしている。自ら進んで追求するためには、子ども自らが課題意識を十分に高める必要があると考える。この課題意識をいかに高めるかによって今後の活動の成否が決まるといってもよいと言える。

課題意識を高めるため、まず「森について考えよう」という共通課題を想定し、単元の導入で「割り箸を使うことはよいか、悪いか」という働きかけをした。前述のような本校の児童の特徴から、そのほとんどが、「割り箸は木を伐採することにつながるのよくない」という意見であった。

次に、「5 円の木づかい箸」に出会わせた。この箸は、国産間伐材を利用したものであり、その箸袋には「使うほどに森林の育成につながる」と書かれている。子どもたちの今までの価値観への揺さぶりである。この箸袋との出会いによって、森林への関心はぐっと子どもたちに近づいた。そして、森林を育成するとはどういうことなのかということ、を、「元気な森と元気でない森」の写真を比べさせながら考えさせ、間伐の作業や意味について知らせた。森の木を伐ることが森を育てるといふ一見矛盾する考えに出会ったことで、子どもたちの森への関心はさらに強まり、実際に体験してみたいという思いに至り、葛川の体験活動につないでいくことができた。



葛川ではまず薄暗い森に入ったあと、自分たちで間伐を行った。間伐によってぽっかり空いた空を眺め、森が明るくなったことを感じることができ、間伐が森を育成することにつながることを実感をもって理解できた。またその後の焼き杉クラフトやキャンプファイヤー、マイ箸作りの活動においても間伐した木が利用されることで、間伐材の多様な利用方法や木の恵みについても感じることもできた。



また、やまのこ専任指導員のお話（ボズーからの手紙）や森の土が持つ水の浄化作用の実験、サーチ・ザ・ツリー、草木染めの体験などを組み入れることで、森の多機能性や森のよさなど、森の多面性に気づかせることができた。

こうして課題意識を高め、広げていき、子ども個々の課題設定に取り組んだ。

体験活動後、教室に戻った子どもたちと今までの学習を振り返りながら、森について自分が調べたいと思う内容を決めさせた。ここで大切にされたことは、「なぜ、その課題をしらべようと思ったのか」という動機付けである。この点が明確でないと、以後の追求が曖昧になる可能性があると考えたからである。



「今まではどれを見ても同じように見えていた木だったけれど、葛川でのサーチ・ザ・ツリーでたくさんの種類の木があることを知ってとても驚いた。葛川だけでもあれだけの種類の木があるのだから日本では一体どれくらいあるのかとても興味を持った。また葛川の先生のお話から森がいろいろな役割を持っていることも分かった。そこで日本の森の様子について調べたいと思った。」ある子の動機である。このように今までの学習や体験と結びつけた課題を設定させることが、子どもが自分にとっての追求の意味を実感することにつながると考える。ひとりひとりの動機を丹念に聞き取りながら、子どもたち個々の課題を明らかにしていった。

子どもたちの中で課題が明確にされると子どもたちは自ずと追求を始める。

追求は子ども個々に委ねられることになるが、子どもたちの力だけでは停滞してしまうことが多い。そこで、やまのこ専任指導員の協力を仰ぎ、お話を聞く場を設けたり、県森林政策課に資料を請求したりした。こうした協力により、時に停滞していた活動が動き出した。ただ全体的には、図書による資料の活用が主なため、自分の課題にぴったり合った資料がなかなか見つけ出せなかったり、また内容が難しすぎて子どもたちのレベルに合わなかったりするケースが多く見られた。追求をよりスムーズに行えるような資料や情報の提供をどう図っていくかが、今後の課題のひとつであると言えよう。ただ、こうした難しさがあっても拘わらず、子どもたちが自分の調べたいことをその子なりに追求し、まとめていくことができたということは、やはり最初の課題意識の高さによるのではないかと考える。

追求した内容について、賞賛や共感を得ることで、子どもたちの満足感や達成感は促される。そしてそれが自分にとっての意味のある活動としての実感につながると考え、単元のまとめの段階で保護者への発表会を行った。当日、多くの保護者の前で堂々と発表する姿はとても印象的であった。

先に述べたように、追求段階における資料の問題は今後考えていかなければならないことではあるが、やまのこ事業を組み入れながら子どもたちの意識が途切れることなくつながった形で学習を進められたことは、この単元の構成という面で一定の成果があったと考える。今後はさらに各段階



でどのような力を高めていくかということをより具体的に構想していく必要があると考える。

また、本単元は、やまのこ事業モデルプログラムの開発の一環として、県森林政策課及び大津市立葛川少年自然の家の全面的な協力の下、進めることができたものである。来年度以降、こうした協力、支援をどう仰いでいくかということも考えていかなければならないと考える。